

ぞ、もてあそび侍るなるべし、

〔紫式部日記〕廿六日、寛弘五年八月御たきものあはせはて、人々にもくばらせ給ふ、まろかしのたる人々あまたつどひゐたり、

〔源氏物語梅枝三十二〕正月のつごもりなれば、おほやけわたくしのどやかなる比ほひに、焼物合給ふ

略○中 かうどもは昔今のとりならべさせ給て、御かたぐにくばり奉らせ給ふたくさづ、あは

せさせ給へと、きこえさせたまへり、をくり物、上達部のろくなど世になきさまに、内にもとにも、

まげくいとなみ給ふにそへて、かたぐにえりと、のへて、かなうすの音み、かしましきころ

なり、おとゞはまん殿にはなれおはしまして、ぞうわ和○承の御いましめのふたつのほうを、いか

でか御み、にはつたへ給ひけん、心にしめて合給ふ、うへはひんがしのなかのはなちいでに、御

まつらひことにふかうまなさせ給ふて、八條の式部卿の御ほうをつたへて、かたみにいどみあ

はせ給ふほど、いみじうひし給へば、にほひのふかさあさ、も、勝負のさだめあるべしと、おとゞ

のの給ふ、人の御おやけなき御あらそひご、ろなり、略○中 前齋院よりとて、ちりすぎたる梅の枝

に付たる御ふみもて参れり、略○中 ぢんのはこに、るりのつき、ふたつすへて、おほきにまろかしつ

ついで給へり、心ばこんるりには五葉の枝、まろきには梅を、えりて、おなじくひきむすびたる、い

とのさまも、なよびかになまめかしうぞま給へる、略○中 人々の心々に合給つる、ふかさあさ、を

かぎあはせ給へるに、いとけうあることおほかり、

〔本朝世紀〕仁平三年三月廿八日丁巳、今日中納言家成卿、於五條坊城亭行薰物合事、門客三十人、互

挑勝負華麗之甚、事絶常篇、天下疲弊、然而由斯者歟、

〔五月兩日記〕六種薰物合文明十年十一月十六日、判

一番 左勝